# 「舞姫」小考
## ——物語中の〈時間〉を読む——

# On MORI Ōgai's "Mai-hime"
## —— A Briet Study of the Narration of his Romance ——

谷口　巌

文学部文化情報メディア学科文化メディア専攻

（二〇〇二年九月十二日受理）

Faculty of Humanities, Department of Humanities and Information, Major in Cultural Studies and Information

TANIGUCHI Iwao

(Received September 12, 2002)

### 一、空想の年譜作り

森鷗外の「舞姫」［初出、明治二十三年一月・国民之友］は、一般的には、用語がやや古びた感はあるが主人公の〈懺悔〉録、又は、作者が小説家であるからにはそこのところは抜け目なく、〈懺悔を装った〉物語、として読まれることの多い作品であろう。

つとに秀作として評価が高いのは、文学史的には当時の水準を一挙に超えたその新鮮な内容——特に恋愛の哀切感の奥深い描出、に因るが、加えて、〈時間〉の流れに沿って淡々と進められて行くその語り口の形式美も、右の哀切感の発生、高揚からやがて破局に至る道筋を必然たらしめるのに、適確な効果をあげている。

さらにこの作品にはモデル問題が存在する。小説中で主人公太田豊太郎が辿る恋愛の軌跡は、どこまで筆者森林太郎［鷗外］の年譜的事実と重複し、或は又逆に距離を置いて考えるべきかということは、一方で作家研究の細部にヒントを提供し、又他方、作家の想像力や作品の創造性を訊ねるのに有効な手掛かりともなるであろう。

そこで本稿では、「舞姫」本文をよりゆっくりと綿密に読むために、主人公太田豊太郎の仮空の年譜作りを試行してみようと思う。冒頭でまず主人公の出生の年を作者鷗外のそれと一致するものと措定し、又各年度についてはその中の季節の移行を適宜に推理するなどの〈冒険〉も多少しているが、採り上げた年譜の材料はすべて「舞姫」本文［原則として岩波書店『鷗外全集・第一巻』、昭和四十六

年版」に基くものである。年譜には各所に注の番号を加え、その箇所にかかわる補説は、表の後にまとめて列挙した。

## 二、作品「舞姫」の本文から推定される主人公の略年譜

**文久二年（一八六二）**　**一歳**

旧藩地にて、太田豊太郎出生。①

早く父の死にあう。②
藩内の学館にて学ぶ。③
維新後上京、予備黌を経て大学法学部に入る。④

**明治十四年（一八八一）**　**十九歳**

大学卒業。某省に出仕する。⑤

**明治十七年（一八八四）**　**二十二歳**

留学の命を受け、**夏**、ベルリンに到着。指示された調査活動に従うとともに、大学にも登録、法律関係の講義を聴く。⑥

「かくて**三年**ばかりは夢の如くにたちしが……⑦」、この間徐々に「所動的」・「器械的」にのみ生きて来た従来の自己への疑いが生じ、大学での勉強も法律関係よりは自分の資質にあった歴史・文学方面に関心が深くなる。

**明治二十年（一八八七）**　**二十五歳**

**夏**の一夕、陋巷の古寺の境内で泣いていたヰクトリア座の踊り子エリス（推定十七歳）と出会い、彼女の緊急の必要金を用立てる。⑧

エリスは過日の礼を述べに豊太郎の下宿に現われ、**夏から秋へ**交際深まる。⑨

**秋**、留学生仲間の中傷にあい、「女優」との交わりをとがめられて、官長より突然の免官、留学費打ち切り、の処置にあう。
追討ちをかけるように故国よりは、母の死の知らせが届く。⑩
悲歎の極のうちに感情激し、エリスとの相互の愛憐の情、遂に肉体関係にまで及ぶ。
時に友人相沢謙吉、豊太郎の窮状を救わんと某新聞社通信員の職を周旋する。エリスも又豊太郎に自家への同棲を提案して、生計のめど何とか立つようになる。

**秋から冬へ**、貧しくともささやかな幸福感に満たされた、二人の相寄り添う生活は続く。⑪

**明治二十一年（一八八八）**　**二十六歳**

**冬が過ぎやがて春来る。**アカデミックな勉学の世界からは徐々に遠ざかったが、替ってジャーナリズムの自由・活発な新しい活動の世界が見えて来て、豊太郎はその方面にだんだん強い魅力を感ずるようになる。

折しも、**三月九日**、プロシヤ王ウイルヘルム一世の死（フレデリック三世後を継ぐ）、**六月十九日**、フレデリック三世の死（ウイルヘルム二世後を継ぐ）、それに伴い「ビスマルク

侯の進退如何」、といった、ホットな政治上社会上の大問題連続し、通信員としての豊太郎は故国に向けて詳細ニュースを送る等、活躍の機会を得る。[12]

**夏からやがて秋へ**、豊太郎のジャーナリズムを通しての〈実学〉体験一層進み、さらにドイツ語の理解力も深まる。

「**明治廿一年の冬は来にけり。**」[13]［本文に書き記されたこの「冬」（の到来）の語は、ほぼ「**十一月**」（の開始）を意味するものと理解すれば、前後のつながりがつき易い。］

エリス、舞台で卒倒、二三日仕事を休む。体調不良の原因はその母により悪阻かと疑わる。

**十一月四日、日曜日。**[14]豊太郎は天方大臣の随員としてベルリンに到着したばかりの相沢から呼び出され、滞在先のカイゼルホオフに赴く。大臣からは彼の語学力に期待した急ぎの翻訳の依頼を受ける。相沢とは食事を共にしたが、彼は豊太郎の現状を、将来に目的を有せず「一少女の情にかゝづら」った人生と見て、意を決して交際を断てと忠告する。豊太郎は親友から、彼の言う将来に目的ある生活（日本の官・政界への再復帰）と、ささやかながら愛に満たされた現在の生活と、いずれを選ぶか迫られたことになり当惑するが、結局は依然たる自己の欠点――主体性の欠除――を露呈して、親友の意見には抵抗し得ず、咄嗟の間に「情縁を断たん」と答えてしまう。

**翌日（十一月五日）**、豊太郎は一夜で仕上げた翻訳を大臣のもとへ提出する。以降折々に大臣との接触の機会ふえる。

**十二月五日頃**、[15]大臣より突然豊太郎に、明朝出発のロシヤ行きの公務に随伴せぬかとの提案あり。結果の後先をよくも考えられぬまま、この折も又豊太郎、即座に、諾の返事をする。一方エリスは医者の診断により正式に妊娠と判明。長期欠勤を理由にキクトリア座踊り子の職も馘首される。[16]

**翌朝**、豊太郎ロシヤに出発。

**十二月七日以降**、酷寒の地ロシヤの首都ペテルスブルクに豊太郎は滞在。現地では又彼はフランス語の語学力を生かして会議や交礼の場に活躍し回りの注目をあびる。[17]

その間エリスは豊太郎にほぼ毎日手紙を書く。深まる愛情と募る不安。滞在の末期には豊太郎の日本帰国の予感におののき、その折は是非同伴をと懇願。[18]ひたむきな恋情を訴える。若い異国女性の愛の深さとそれに十分応え得ない己れの優柔不断。やがて犯すことを避け難くなった漠然たる罪の意識。豊太郎の心は大きく動揺し始める。

**明治二十二年（一八八九）　二十七歳**

**一月一日**、早朝、ベルリンに帰着しわが家に戻った豊太郎は、孤独に耐えて待ちに待ったエリスの心底からの愛情に打たれ、又出産の日に備えて早くも用意を始めたという襁褓類のうず高き白さに、圧倒される。[19]

**一月五日頃**、夕刻豊太郎は大臣に招かれ、近づいた自分の「還東」の機会に船をともにして帰国する意志は無いかと、最終的に問われる。状況的に追いつめられて遂にここに至った、心弱き豊太郎には、エリスの真情を裏切った返事――「承り侍り」しか無かった。[20]

ホテルは出たが心乱れた豊太郎はまっすぐにわが家に向かうことは出来ない。夢遊病者の如く、逆方向に当る獣苑、ブランデンブルゲル門あたりを徘徊し、衣服破れ雪と泥とにまみれ、亡霊の如くわが家に辿りついたのは半夜過ぎであった。驚愕するエリス。豊太郎はそのまま昏倒、人事不省となる。[21]

**二月初旬**、豊太郎の意識戻る。その間にエリス、相沢の説明により、大臣と共に豊太郎帰国のこと、本人の意志をも容れた既決事項なるを知り、「豊太郎ぬしかくまでに我をば欺き玉ひしか」と、叫んで錯乱。極度の神経の異常・興奮はそのままパラノイア（妄想症）へと移行。「生ける屍」に似た治癒不能の状態となる。[22]

**二月中旬以降**、豊太郎の病気本復す。[23]

**二月二十日頃**、豊太郎は大臣一行と共にベルリンを離れる。エリスのもとにはせめてもの生活費・出産用の入費等を残す。

帰国の経路は、まず鉄路を南にとりスイス、イタリアを通過、**二月末頃**、ブリンデイシイ港より乗船、四年八ケ月ほどに渡るヨーロッパ生活に別れを告げる。[24]

サイゴン寄港は**三月末頃**か。船上二泊。その第二夜、思い余って豊太郎は「舞姫」の稿を起こす。[25]

**四月十日頃**、日本帰航。サイゴンで起草した「舞姫」の稿、船中、帰国後の雑事・繁忙にまぎれ、その間一気には成らず。以降も折を見て継続的に執筆、推敲の時を経て、最終的に筆を擱いたのは、漠然ながら**五月初め頃**、とでも見るか。[26]

彼はこの小説の末尾を、次のような言葉で結んだ。

> 嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ、**今日まで**も残れりけり。[27]
>
> （ドイツではエリスの胎内に、はや八ケ月の生命が息づいていた頃かと思われる。）

（二十）

## 三、略年譜に対する注

(1)「舞姫」で主人公豊太郎は自分の生れた年を明示していないが、秀才コースを順調に進んで「学士の称」に達したのを、「十九の歳」と回想している。これは作者鷗外の場合と一致する。その数え方は両者とも、当時のいわゆる〈数え年〉によったものであろう。そこで豊太郎の生年を〈文久二年〉と仮定する。

「舞姫」は鷗外の出世作であり、その内容には多分に彼自身の経験が取り込まれていると思われる。処女作の成功に賭けた彼が、主人公の青年の心情・行動の描写のリアリテイを出来るだけ保証するために、まずとった手段が、このモデルと主人公との相似化ということであった。そのための出発点として、彼は主人公の生年を、自身と同年にイメージしたのであろう。

なお主人公の姓名・太田豊太郎と、作者の本名・森林太郎との間にある、形式上や意味上の相関性や差異点も、出生に関連した話題であるが、言及を避ける。

(2) 鷗外の実父静男の死は明治二十九年。小説の中で「父をば早く喪」ったことにしたのは、豊太郎の性格の中にある〈父性〉

とでも言うべきものの未成熟、又のち滞独中に母の死を知った時の故国喪失感（エリスへの一層の牽引力）の蓋然性等を、話の筋の方からあらかじめ援けておこうとしたのであろう。

(3) 鴎外が通ったのは石見国津和野藩の養老館。七歳の頃より。

(4) 鴎外は明治七年医学部に入った。小説で豊太郎の進学先を法学部としたのは、秀才の集まりで功名心に富むが、「所動的」「器械的」な面も無しとはしない、この部の学生を諷したものであろう。

(5) 鴎外は同年七月医学部を卒業。事情あってしばらくの浪人生活の後、十二月陸軍省に入った。豊太郎が卒業したのも恐らく七月。勤勉一途のコチコチ秀才として法律関係のコースを外れず、恐らく司法省辺りへストレートに進んだものと思われる。

(6) 作品中では豊太郎の日本出国、ベルリン到着の時期等は明示されていない。しかし（恐らくは一か月半ほどかかった西航の船旅の後に）、主人公が「ヨーロッパの新大都の中央」に降り立って、歓喜とともに描写し始めるウンテル・デン・リンデンの光景から伝わって来る季節の感じは、まちがいなく〈夏〉であろう。彼が目をやる対象は、すべて明るい「光彩」や「色沢」に満ちており、「漲り落つる噴井の水」「緑樹枝をさし交はしたる」と言った表現に至れば、さらに一歩踏み込んで、〈盛夏〉の頃を想像することも可能かも知れない。

　因みに、西欧における大学の新学年の受講登録は、九月初～中旬が一般的であると思われる。

(7) 鴎外の場合ベルリン着は明治十七年の十月であった。ほどなくライプチヒへと移り衛生学の研究開始。その後ドレスデン、ミュンヘンと滞在先を変えて研究続行。ライプチヒ以降の三都市における滞在期間の合計はほぼ二年六か月であった。

　明治二十年四月、ベルリンに戻りここが鴎外のドイツでの最終滞在先となる。研究滞在の期間は翌二十一年七月（帰りは上司である石黒軍医監と同行）まで、約一年三か月の間。

(8) 太田豊太郎のエリスとの出会いの季節を〈夏〉と見立てて見たのも本文中の叙述による。出会いに至る前の「夕暮」を、彼は「獣苑」（市内の公園）を「漫歩」して過ごしているのだが、これは北ヨーロッパにおける夏期の日の入りの遅さを前提にしないと考えにくい。やがて辿り着いた「クロステル巷」ではまだ「敷布」「襦袢」等の洗濯物が取り込まれずに、二階の手すりに残っているが、「路上」にたたずむ老人の姿とともに、これも又秋冷や酷寒の季節では考えにくい情景である。

　エリスの年齢については、豊太郎は、初見の彼女を「年は十六、七なるべし」と見立てている。少し後の、屋内に移ってからの会話の場面では、彼女は（ヰクトリア座の踊り子となって）「早や二年」と自分の閲歴を明かしている。働き始めたのは今より更にいたいけな年頃であったと現在の可憐さをも強調する筆づかいであろう。太田の述べるところに従えば、豊太郎と彼女の年齢差は七、八歳。年の離れた兄妹のような男女の組み合わせだったということになるようだ。

　鴎外帰国の直後、すぐ後の船で彼を追って来たドイツ女性は名をエリーゼと言う。小説中のエリスのモデルと目されているが、その容貌、年齢等についての詳細は、確証を欠く。

(9) この辺りの時間の経過は、「余と少女との交漸く繁くなりもて

行きて…」といった表現で示される。

(10) 鴎外の実母峰子の死は大正五年。

(11) この辺り、季節の推移は、豊太郎とエリスとの相離れ相寄る、労働と休息の日々の描写を通してかすかに示される。例えば豊太郎の仕事は、通信員として毎日、新聞の記事を作ることであり、そのために彼が通い始める休息所は、窓も小さく光も乏しく、「一盞の珈琲の冷むる」をも忘れ、彼は「冷やかなる石卓」を作業台にして、懸命に小半日を過ごすのである。描写から実感されて来るものは冷気から寒気、即ち秋から冬への〈時間〉の移行であろう。

　作者鴎外について「舞姫」との関連でこの年後半の年譜中から目立った出来事一つを拾って置く。明治二十年九月、軍医監石黒忠悳に従ってカールスルーエの国際赤十字会議に出席した。滞在期間は数日だったが、この折の経験は約一か月に引き伸ばされて、「舞姫」では、主人公豊太郎のペテルスブルクにおける活躍、恋情を抑え切れない毎日のアリスからの手紙、の描写となる。

(12) ウイルヘルム一世（一七九七～一八八八）、享年は九十一。長命で国民の敬愛の的であったこの王の晩年の姿は、「舞姫」の冒頭ウンテル・デン・リンデンの描写の場面でも、「まだ…街に臨める窓に倚りたもう」と、捉えられている。鴎外には実体験に属することであり、〈現代〉史中の人物であった。

　フレデリック三世（一八三一～一八八八）、ウイルヘルム二世（通称カイゼル、一八五九～一九四一）が、ともに現代史上の人物であることは前者と同じ（ことにカイゼルと鴎外との年齢差は僅かに三歳）。ロマンチックな美文といういたずらな先入観に惑わされることなく読めば、鴎外の独逸土産三部作は、いずれも〈現代〉を意識した同時代描写の小説なのである。

　この辺り、言うまでもなく、冬の終りから春、夏にかけての記述。二人の王の逝去の日付がそれを根拠づけている。「わが学問は荒みぬ」と慨嘆のフレーズを二度くり返しながらも、豊太郎の生活は新しい軌道に乗り、季節の変化とも相応ずるように明るさが甦り、気力もとり戻している。

(13) 仮空の物語（フイクション）として、基本的には不確かな〈時間〉の流れの中を漂うように、これまで語り進めて来た小説の世界を、現実に近い確かな今の〈時間〉の側へと一気に手渡すべく、飛躍（ジャンプ）一番——の効果をあげているのがこの「明治廿一年の冬」の表現である。これ以降〈時間〉は、小説執筆直後の「現在」に向かって、部分々々をヴイジュアルに拡大して見せつつ、テンポを速めて進行する。

　年譜中にも書いたが、右の「冬」の意味はどうしても、太陽暦カレンダー上の「十一月」でなければならない。そのように解くことによって、これ以降の小説中の〈時間〉の流れ（事件の継起）との間にも、整合性が生ずるかと思われる。冬を〈立冬〉（十一月の初め頃）の義に解することは日本の旧暦の用語法の中にもあることだし、北緯五十度を越すベルリンでの冬の急激な到来の印象は、直前の滞在地が南方のミュンヘンであった鴎外にとっても、印象に強く残ることであったかと思われる。

(14) 十一月「四日」と指定したのは、これより先のペテルスブルク行きの記事より逆算したもの。加えて「舞姫」中には、この

日の出来事を述べるに先立ち、「今朝は日曜なれば」とある。明治二十一年（一八八八）十一月四日は、実際にも日曜日である。

(15)「一月ばかり過ぎて、或る日…」。

(16)「彼（女）は医者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性なりしゆゑ幾月か心づかでありけん。座頭よりは休むことのあまりに久しければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだ一月ばかりなるに、かく厳しきは故あればなるべし。」

(17) 当時ベルリン〜ペテルスブルク間の汽車の旅程は、ほぼ一泊二日といったところであった。留学当時鴎外は、フランス語はドイツ語ほどには学んでいなかったが、その言葉の魅力はよく心得ており、のち小倉の左遷時代に、熱心に勉強をしている。

(18)「この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書を寄せしかばえ忘れざりき…」。「又程経てのふみは頗る思ひせまりて書きたる如くなりき。…暫しの旅とて立出で玉ひしより此二十日ばかり、別離の思は日にけに茂り行くのみ…」。

(19)「余が大臣の一行と倶にベルリンに帰りしは、恰も是れ新年の旦なりき。」

(20)「二三日の間は大臣をも、たびの疲れやおはさんとて敢て訪らはず、家にのみ籠り居しが、或る日の夕暮れ使して招かれぬ。…われと共に東にかへる心なきか…」。

(21)「一月上旬の夜なれば、ウンテル・デン・リンデンの酒家、茶店は猶ほ人の出入盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覚えず。我脳中には唯々我は免すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ち〱たりき。」

(22)「人事を知る程になりしは数週の後なりき。…余は…病床に侍するエリスを見て、その変りたる姿に驚きぬ。彼はこの数週の内にいたく痩せて…灰色の頬は落ちたり。」

(23)「余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を濺ぎしは幾度ぞ。」
この辺りの〈時間〉の経過の読み方は、物語の自然な流れに身を任せた（つもり）の、僕の推測に過ぎない。

(24) 森鴎外の場合帰国の実際の経路は、ベルリンを離れて後ロンドン、パリと、北欧の地をいささか蛇行するものであった。小説の中で、豊太郎をまっすぐ南へと向かわせるのは、エリスとのつらい思い出からの逃走を心の中で秘かに願ってもいる主人公の弱く卑しい心を、いくらかでも暗示する意図があるかも知れぬ。

(25) しかし、心と肉体とに深く刻まれた愛の思い出には、機会あらばまたその〈現実〉を取り返したいと願う根深い情念が相伴う。「舞姫」の中で、豊太郎はそれを表現して「恨」と言い「懐旧の情」とも言う。「嗚呼いかにして此恨を銷せむ。」——この思いの切実さ（あるいは露骨な正直さ）の中に「舞姫」の愛の実相はある。その「恨」の思いは、西洋から日本への帰国の途上、旅の「初め」のブリンヂイシイまで（スイス、イタリアの見学日程にも配慮すれば約十日間）において早くも生じ、東へ帰ることが決定的となった「中頃」の船の旅（地中海上〜インド洋上の約一か月間）に至るに及んで、いよいよ取り返しのつかない切なさを深めて行くのである。そして「今」サイゴン。植民地ではあるがなお〈西洋〉の匂いの色濃く感じられる最終の寄港地。ここを離れればあとはもう十日ほどで、〈東洋〉そ

のものような江戸以来の故国が待つばかりである。旅の日数とともに凝り固まって来た己れの「恨」のやりどころに思い屈し、上陸する気もまるで起らぬまま、主人公は、ドイツで「日記」用に買った冊子の頁を開き、われとわが身に向けて、せめてもと告白の記（confession）を書き始めるのである。

(26) この辺りの「舞姫」（太田豊太郎の告白録）の成稿過程の日付は、全くの推測である。ただし僕としては、多少の〈理由〉も用意してあり、以下にそのことを書き加えて置くことにしよう。

　小説の構成上からは、そう読み終えるのが形式的に整った感じになるとは言え、豊太郎が、エリスとのこの残る思いのすべてを、「房奴の来て電気線の鍵を捩るには猶程もあるべければ…」と書き始めたその同じ「中等室の卓のほとり」で、その夜一気に書き上げ得たとはとても信じ難い。岩波の『鴎外全集』の本文（旧漢字、旧仮名づかい）によっておおまかに計算しただけでも、この作品の総字数は一万六千余字、四百字詰原稿用紙にして、その執筆総量は四十枚余にのぼるのである。しかもそこに込められた主題の深さ、文章の彫琢の度合を考えれば、この思いはなおさらである。執筆はその夜はしかるべきところで中断され、続稿は後の機会に託されたのであろう。最短期間にしてなお一、二か月のプラスを見込んで置きたい。

(27) 今一つ、内容面からの指摘として提出して置きたく思うのは、豊太郎の「恨」の、その後の消長・変化についてである。繰り返せば豊太郎は「舞姫」の文章の末節を、次のような、親友に対する隠された思いで結んだのであった。「嗚呼、相沢謙吉…良友…。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ、今日までも残れりけり」。この言葉の中の「今日まで」とは、いったい豊太郎の、どこの地点（＝どこの時点）における発言としてわれわれは受け容れるべきであろうか。

　「今日まで」という表現はあくまでも「今日まで」であって、明日以降の継続・残存を必ずしも保証するものではない。そのあやうげな人間の心の失せ処を、西洋を離れてわずか一か月余のサイゴン辺りに設定されては、最大の悲劇の当事者エリスとしてはたまったものではないのである。太田豊太郎なる、われらが小説の主人公は、決して偉大なる人物とは言えず、〈罪〉の意識においてもなお未成熟（あるいは終生そうかも知れず）の感を免れないが、せめて小説の中で、相沢的な人物を「憎む」正直な心を、日本帰還のその後もずっと持ち続けて欲しい（出来れば人間性や罪の問題にも考え方を深めて欲しい）、と読者として願う時、「今日まで」の表現の場所は、サイゴン辺りでなく、せめて一、二か月後の東京でありたいのである。

　最後につけ加える。作家森鴎外の小説「舞姫」執筆の狙い（主題とすべきもの）はどこに求められるか。考え方はいろいろあろうが、今回また繰り返し読んで見た僕の印象としては、やはり彼が改訂版の『水沫集』（明治三十九年）につけた「序」文中の、

　舞姫。小なる人物の小なる生涯の小なる旅路の一里塚

の寸言こそ、恐らくは彼自身にかかわる過去〜未来の深い思いをも込めて、重く静かに、存在するもののように思われる。

――二〇〇二・九・一二　稿――